

「武庫川国文」第八十九号 抜刷
令和二年十一月一日 発行

人麻呂吉野讃歌

―「かへり見」る吉野―

影山尚之

人麻呂吉野讃歌——「かへり見」る吉野——

影 山 尚 之

はじめに

皇都は人麻呂の揺るぎない前提だった。新京藤原への讃美も旧都飛鳥への哀惜も、人麻呂作歌の主題に昇華することがない。人麻呂にとつて飛鳥京は「天皇の敷きます国」であり（2・一六七「日並皇子尊殯宮挽歌」、藤原京は「太敷かす都」（1・四五「安騎野遊獵讃歌」）であつてともに不変盤石の都市、藤原へ都が遷つた後の飛鳥を、

…天地の いや遠長く 偲ひ行かむ み名にかかせる 明日香川 万代までに はしきやし 我が大君の 形見にここを

（2・一九六「明日香皇女殯宮挽歌」）と詠じて薨去した皇女を明日香川の名に偲ぶことはしても、かつての都を古里として追懐することはなかった。天皇（おそらく持統）が雷岳に遊んだ折に、

大君は神にしませば天雲の雷の上に廬りせるかも（3・二三五）
とうたい、長皇子の狛路池出遊に際しても、

大君は神にしませば真木の立つ荒山中に海をなすかも

（3・二四一）
を献じているが、これらは京の内側か、せいぜい延長上の一地点を誇張的に称讃したに過ぎず、宮都の規模を背景にしたものとはちが

う。いまここに主張したいのは、そのような人麻呂の脈絡における「近江荒都歌」（1・二九～三二）と「吉野宮行幸讃歌」（1・三六～三九）との特殊性である。小稿の考察対象は後者だが、ふたつの作品はさまざまな点で対称的であると判断するため、前者を視野に収めつつ考えてみたい。

一 近江荒都歌と吉野讃歌

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉だすき 畝傍の山の 檀原の ひじりの御代ゆ 或云「宮ゆ」生れましし 神のことごと つがの木の いや継ぎ継ぎに 天の下 知らしめしし 或云「めしける」 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越え 或云「そらみつ 大和を置き あをによし 奈良山越えて」 いかさまに 思ほしめせか 或云「思ほしけめか」 天ざる 鄙にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は ことと聞けども 大殿は ことと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる 或云「霞立ち 春日か 霧れる 夏草か しげくなりぬる」 ももしきの 大宮所 見れば悲しも 或云「見ればさぶしも」 （1・二九）

反歌

楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の舟待ちかねつ

(1・三〇)

楽浪の志賀の二云「比良の」大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも一云「逢はむと思へや」
(1・三二)

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

やすみしし 我が大君の 聞こし食す 天の下に 国はしも
さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の
花散らふ 秋津の野辺に 宮柱 太敷きませば ももしきの
大宮人は 舟並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る この川の
絶ゆることなく この山の いや高知らす 水そそく 瀧の都
は 見れど飽かぬかも
(1・三六)

反歌

見れど飽かぬ吉野の川の常滑の絶ゆることなくまたかへり見む
(1・三七)
やすみしし 我が大君 神ながら 神さびせすと 吉野川 激
つ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば
たたなはる 青垣山 山神の 奉る御調と 春へには 花かざ
し持ち 秋立てば 黄葉かざせり 一云「もみち葉かざし」 行
き沿ふ 川の神も 大御食に 仕へ奉ると 上つ瀬に 鵜川を
立ち 下つ瀬に 小網さし渡す 山川も 依りて仕ふる 神の
御代かも
(1・三八)

反歌

山川も依りて仕ふる神ながら激つ河内に舟出せずかも
(1・三九)

右日本紀曰 三年己丑正月天皇幸吉野宮 八月幸吉野宮
四年庚寅二月幸吉野宮 五月幸吉野宮 五年辛卯正月幸
吉野宮 四月幸吉野宮者 未詳知何月從駕作歌

前者は近江大津京の荒廃を悼む歌、後者は吉野宮行幸を契機とする離宮讃歌である。ともに制作年次不明ながら、配列から推して持統朝前半の作と見ることに異論はあるまい。二組の長反歌から成る吉野讃歌が当初から連作を企図したものか後に組み合わされたか、いずれにも解しうるところだが、ここでは長歌の補完的なありように鑑みて一連の作と見ておく。そのときには両者間の外表面の差異が目立つことになり、かつ異伝注記の頻度に個別の作品形成過程を予測させるものの、それでもなお二つの作品は構想のうえで連関すると見られる。荒都悲傷歌と離宮行幸讃歌と、ともに後代の宮廷歌へ継承される劈頭の位置にある右は、「宮」というトポスを共通にしつつ収斂する心情を正反対に向けており、その心情を誘発する現象・事象も対照的であって、両者はまさしく表裏の關係にあると受け取れる。

まずは両作品を概観するためそれぞれの長歌の内容を簡条書きしで示す。なお、ここでは異伝を考慮に入れず本文歌のみを対象にする。
〔近江荒都歌〕

神武天皇以来代々天皇が大和で国家統治く天智天皇による近江大津（「天さかる鄙」）への遷都（不審）く天智天皇大津宮の宮殿所在地不可視く跡地に立つ主体の悲傷

〔吉野讃歌〕

第一長歌：天皇による離宮の造宮く大宮人による終日奉仕く離宮の永遠の繁栄（離宮讃美）

第二長歌：神としての天皇による国見／山川の神による四時の奉仕／天皇即神（大君讚美）

近江荒都歌は、天智天皇が神武天皇以来の伝統の皇居であった大和を捨て「あまぎかる鄙」の地・近江大津を都に選定したところその皇都は滅亡してしまい、ここが宮殿のあった現地に聞いても今や春草・春霞に覆われて何も見えない、そのような事態に接して悲しい、という展開である。歌の対象はむしろ近江大津宮、そこに遷都を実行したのは天智天皇、歌中では天智を指して「天皇の神の尊」と称するけれども、その行為を人麻呂は「いかさまに思ほしめせか」と訝つてもいい。この挿入句をめぐっては古来さまざまな議論が交わされたが、今回その検討を行うことはしない。

改めて感じることは、この引き締まった、卓抜な構想と描写だ。枕詞と対句を多用してゆつたりとした叙述を起動しつつも、長歌に四つの、反歌にはそれぞれ一つずつの逆接の助詞が挟まれ、それが作品に重厚な緊張感を漂わせている。かつて五味智英が「動乱調」と名付けた独特の調べである。³緊張感という点では「いかさまに」の挿入句もそれに一役買っている。冒頭の皇統譜を思わせる部分から中間の道行きを経て後半の「荒都」現場に立ち会う衝撃まで、本文歌は全三七句を構えるが、弛緩した印象はいつさい抱かれなない。稿者一人の主観ではあるまい。

反歌二首は、現場が「唐崎」へ移動するために長歌とは異なる展開があるかと思わせるけれども、「志賀の唐崎」「志賀の大わだ」は往時のままの平穏を留めているがら「大宮人の舟」も「昔の人」もその画面上にいつさい発見することができない、という空しさに落着する叙述は、長歌後半で「大宮」「大殿」が見えないと訴えるの

と同趣旨であり、滅亡した大津京がもはや「人」の暮らす領域でなく自然に帰したことを傷ましく受けとめている。事実として近江大津京が荒廃したのは壬申年の内乱によってだから、持統朝前半から遡る二〇年ほど以前の痕跡が何一つ残らないというのは誇張と理解して誤るまいが、歌はあくまでそのようにうたうのである。

以上をまとめて言うなら、作品の主眼は対象である近江大津宮とその周辺が不可視であること、現前しないことを慨嘆的に訴える点にある。神としての天皇による近江大津建都は人麻呂にとっては伝聞に属することであり、いまここでそれを見ることも実感することもあるいは過去に遡って是非を評価することもできない、というもどかしい気分が作品の底流をなし、その心情を専ら請け負うのが「いかさまに思ほしめせか」の発語だと見ればよいだろう。

吉野讚歌は二つの長反歌から成り、第一長反歌は吉野宮への称賛に、第二長反歌は宮を営む大君への讚美に収斂する。先に補完的と言ったのはこの点をとらえてのことである。第一長歌は、天皇の領有する国々のうちで山川の清浄な河内として吉野に御心を寄せ「宮柱」を太敷いたところ、大宮人は舟を吉野川に浮かべ朝夕に精勤奉仕、その賑々しいさまを見るにつけても吉野離宮の永遠堅牢が確信され、いくら見ても飽きることがない、とうたいあげる。反歌は長歌の帰着を承けて、永遠にここへ立ち返って再び離宮を見ようという。「見る」ことへの著しい執着がここにある。先ほどの近江荒都歌と比べこちらは二組ともに長歌末尾の表現を繰り返してうたうから、その点の印象はかなり異なっている。

第二長歌は、天皇が神としての振る舞いを実践するべく吉野川のほとりに高殿を設定し、そこに登り立って国見をする、山の神は

春秋の美景を現出させることで、川の神は天皇の食前に豊かな幸を献ずることにより一斉に奉仕を開始、そのさまはまさに神の御代であると称辞を並べて結ぶ。反歌はうたい出しを長歌末三句にほとんど重ね、吉野の自然神が奉仕する天皇を神と崇め、その船出のさまを仰ぐごとくに讃えるという内容である。

前述したとおり、長歌一首に反歌二首を従える前者と、長歌一首反歌一首を反復する後者とは、その長反歌の関係性も含めて、異なりがまず目に付くのは事実だ。表現主体に抱かれる心情は哀悼と称賛の対極、そのことと呼応するかのごとく逆接の語は後者には一度しか用いられないで、むしろ順接「ば」が二組の連関性の確保に重要な機能を果たしている。やはり五味智英が「端嚴調」と名付けた、凹凸の少ない安定した叙述である。⁽⁵⁾ただしよく見れば、かかる表面上の異質はむしろ両作品の根ざす基盤の同一性に起因するものであると気付かれよう。詠作者人麻呂は同じ質のまなざしを対象に向け、同じ角度で廃都と離宮を把握している。表裏の関係にあると述べた所以である。

二 「近江」「吉野」の共通性と対称性

そこで、改めて次のように整理してみる。

	近	吉	
対象(場)	大津宮	吉野宮	
行為主体	天皇	我が大君	我が大君
属性	神	神	
主体の行為	大和を去り、鄙の地近江を京に選定	京外の国々より吉野を選定し離宮造営	
行為の結果	京の滅亡・大宮人の不在・自然回帰	大宮人の奉仕、離宮の繁栄・永続	山川の神が天皇に奉仕

近江大津京と吉野宮は、人麻呂の現在地すなわち皇都を起点にすればいずれもその外側にあって、一定の距離を置いた地点にある。天智天皇は「大和を置き」奈良山を越え、「近江の国の楽浪の大津」へ移動してそこを皇都とした。持統天皇もまた飛鳥の地を発ち「山川の清き河内」であるところの「吉野の国」に赴いてそこに宮を造営する。前者は畿外ゆえ「天ざる鄙」と外縁であることが明確に言語化されるが、後者の「山川の清き河内」もまた非都市である点で近江と本質を異にしない。それぞれの地を選定した主体はどちらも天皇(大君)であり、その主体的意志に基づいてその行為が果たされていることが、前者では「いかさまに思ほしめせか」の句によって、後者では「御心を吉野の国」の句によって明示されている。遷都および離宮造営を実行した天皇を前者は「天皇の神の尊」といい、後者は「神ながら神さびせすと」うたう。ともに人智の及ばぬ神(超越者)の行為だというのである。⁽⁶⁾天智天皇と持統天皇、ふたりの天皇を人麻呂はやはり同じ角度で見上げている。

神としての天皇による行為が、前者は皇都の滅亡をもたらし、後者は、少なくとも歌表現の上では、大いなる繁栄の永続を完遂する。近江大津京滅亡のさまは、皇都の中枢部が「春草の繁く生ひたる霞立ち春日の霧れる」と自然に回帰している状況によって象徴的に描かれ、「大宮人の舟」を待ち迎えることができず「昔の人」にもはや逢えないという、「大宮人」の不在というかたちであらわされている。一方の吉野離宮は、「花散らふ秋津の野辺」に人工物である「宮柱」を太く敷き立てることで「大宮人」が一斉にそこに出現して終日奉仕、「高殿」を建てて国見をすれば吉野の自然は瞬時にして「大君」に従えられ——アンダーコントロールの状態に

なり——四時つねに理想的な環境に整えられる。前者は人が去つて自然の状態に戻り、後者は神としての天皇が自然を従えた——手懷けた——という構図、近江大津にもかつて盤石に屹立していたはずの宮柱は今はなく、吉野の地には将来にわたつて宮柱も高殿も威容を誇っている。大宮人の舟を失つた前者と、天皇自ら吉野川に舟を浮かべる後者、かく見れば両者の共通性と対称性が鮮明になるだろう。森朝男氏「景としての大宮人——宮廷歌人論として——」の有効な提言が思い起こされる。

右の表には示すことができなかったけれども、ふたつの作品のもつとも顕著な差異は、宮都の地を「見る」ことへの消極と積極とにある。繰り返しになるが、前者は「大宮はこと聞けども 大殿はこと言へども」と宮殿の置かれた地点に立ちながら「春草の繁く生ひたる 霞立ち春日の霧れる」と嘆じてそれが見えないことを訴え、反歌にあつても同様に、かつて存在したものがいま眼前しないことをしきりに取り立ててうたうのである。滅びた宮都を見たくないという哀訴は、高市黒人歌、

高市連黒人近江舊都歌一首

かく故に見じと言ふものを楽浪の古き都を見せつともとな

(3・三〇五)

右歌或本曰少辨作也 未審此少弁者也

にもあらわれていて、これを当時の共通認識と見るか、右が近江荒都歌を踏まえていると理解するか、どちらの可能性があると思うが、いずれにせよ荒都を見ることへの消極的な意志が貫かれている。

ところが後者は第一長反歌において「見れど飽かぬ」——「見れど飽かぬ」——「またかへり見む」と畳みかけるように「見る」への志

向を表明する。「見れど飽かぬ」「またかへり見む」はどちらも対象が美麗で理想的な状態にあることをこのうえなく賛嘆する表現だ。持統天皇が在位中に三十一回の吉野行幸を挙行することを思えば、人麻呂による表現選択はあるいはその現実と関係するのかもしれない。ただし両句はほどなく行幸歌また羈旅歌の常套句に成長する(引用は全用例ではない)。

あられ打つ安良礼松原住吉の弟日娘子と見れど飽かぬかも

(1・六五 長皇子)

山高み白木綿花に落ち激つ瀧の河内は見れど飽かぬかも

(6・九〇 金村「吉野離宮行幸」)

やすみしし 我が大君の あり通ふ 難波の宮は いさなとり
海片付きて 玉拾ふ 浜辺を近み 朝はふる 波の音騒き 夕
なぎに 梶の音聞こゆ 暁の 寢覚に聞けば 海石の 潮千の
むた 浦渚には 千鳥つま呼び 葦辺には 鶴が音とよむ 見
る人の 語りにすれば 聞く人の 見まく欲りする 御食向か
ふ 味経の宮は 見れど飽かぬかも

(6・一〇六 田辺福麻呂「難波宮作歌」)

玉津島見れども飽かずいかにして包み持ち行かむ見ぬ人のため

(7・一二二 羈旅作)

ま梶貫き舟し行かずは見れど飽かぬ麻里布の浦に宿りせましを

(15・三六三 遺新羅使人)

み吉野の秋津の川の万代に絶ゆることなくまたかへり見む

(6・九一一 金村「吉野離宮行幸」)

白崎は幸くあり待て大舟にま梶しじ貫きまたかへり見む

(9・一六六 紀伊国行幸)

天地を訴へ乞ひ祈み幸くあらばまたかへり見む志賀の唐崎

(13・三二四)

宮廷人にとつてもつとも価値高く、幾度も見たいと願ひ、繰り返し見ることが必然であると自覚される対象（環境）を右の表現は切り取っている。裏返していえば、「見る」を言明することで対象の繁栄した理想的な状態を確認しようとするのである。やや時代が降るとたとえば、

もししきの大宮人のかづらけるしだり柳は見れど飽かぬかも

(10・一八五二)

玉梓の君が使ひの手折り来るこの秋萩は見れど飽かぬかも

(10・二二二)

のような日常生活空間に眼前する事象を称える例があらわれるものの、多くは稀にしか実見することのできない旅先の景が対象に据えられる。それが離宮であるときは、天皇がそこを選定し宮を造りあげた以上、いつまでも最高の状態を保持し続けなければならないので、宮廷人はその状態を認識し、安堵し、祝福するために意志的に対象を見る。「見る」行為は対象への積極的な関与（働きかけ）であるとすることもできよう。

三 自然と宮都

人は自然のなかで安穩幸福に生きることではない。ここである「自然」は近代日本が nature の訳語として獲得したそれではなく、たとえば老子に、

人法^レ地、地法^レ天、天法^レ道、道法^レ自然^一。

とある、「人為の加わらない、本来のまま」の意である。次の風土記説話がいま参考になる。

A 古老の曰へらく、^{石村の玉穂の宮に大八洲駈しめしし天皇の}み世に、人あり。^{箭括の氏麻多智といふ。郡より西の谷の葦}原を壘^{ひら}開きて新たに治りし田を献りき。この時、^{夜刀の神、}相群れ引き率て、^{悉く}に到り来て、左右に防^さ障へて耕^う佃ることなからしむ。俗云はく、蛇を謂ひて夜刀の神と爲す。その形蛇の身にして頭に角あり。率あて難を免るる時に、見る人あらば、家門を破壊し子孫継かず。凡てこの郡の側の郊原に、甚多に住めり。ここに、麻多智、大く怒りの情を起こし、甲^{よろひ}鎧を著^お被^かけ自身^{みづか}ら仗を執り、打ち殺し驅逐^{おひやり}ひき。すなはち山口に至り、^{標の梶を堺の堀に置}て、夜刀の神に告げて云ひしく、「此より以上は、神の地と爲すを聴す。此より以下は、人の田を作るべし。今より以後、吾れ神の祝^{はふり}と爲りて、永代に敬ひ祭らむ。冀^{ねが}はくはな崇りそ、な恨みそ」といひて、社を設け初めて祭りきといへり。すなはち^{またつくした}還^ま耕田^{はたら}一十町余を^{ひら}発^はき、麻多智の子孫、相承けて祭を致して、今に至るも絶えず。〔常陸国風土記 行方郡〕

B 姫社の郷。この郷の中に川あり。名を山道川と曰ふ。その源は郡の北の山より出で、南に流れて御井の大川に会ふ。昔者、この川の西に、荒^あぶる神あり、行路^ぎく人、多に殺され、半ばは^し凌^あぎ半ばは殺にき。時に、崇る由^うをトへ求^{もと}ぐに兆へて云はく、「筑前の国宗像の郡の人、^か珂是古^こをして、吾が社を祭らしめよ。若し願ひに合^あはば、荒ぶる心を起こさじ」といへば、珂是古を覓^みぎて神の社を祭らしめき。珂是古、すなはち幡を捧^たげて祈^{いの}禱^たみて云はく、「誠に吾が祀^{まつり}を欲りするにあらば、この幡、風の

順に飛び往きて、吾を願ひする神の辺に墮ちよ」といふ。すなはち幡を挙げ、風の順に放ち遣りき。時に、その幡飛び往きて、御原の郡姫社の社に墮ち、更還り飛び来て、この山道川の辺の田村に落ちき。珂是古、自づから神の在ます処を知りき。その夜、夢に臥機（久都毘枳と謂ふ）と絡琛（多々利と謂ふ）と舞ひ遊び出で来、珂是古を圧し驚かすと見き。ここに、織女神と知り。すなはち社を立てて祭る。尔より已来、路行く人、殺害されず。因りて姫社と曰ひ、今以て郷の名と為す。（肥前国風土記）基肄郡）

「自然」とは、右のとおり蛇身にして角をもつ「夜刀神」が跋扈（A）道行く人を半ば殺す荒ぶる神が支配する（B）過酷な環境をいう。古事記の、「身一つに八つの頭・八つの尾」のある八俣大蛇を思い起こしてもよい。荒ぶる神は人を拒み攻撃的姿勢を示すので、そうした圧倒的な自然を前に無力の民衆は脅えひれ伏すほかなく、足名椎・手名椎夫婦は自らの娘七人を無抵抗に大蛇に差し出すのだった。「箭括の麻多智」と「珂是古」は、古事記のササノヲと同様に超越的な智恵と勇氣をもつて自然と対峙し、あるときは自然の神を駆逐、またあるときはそれを丁重に祀ることをして、人々による安定的な農耕や安全な往來を確保してゆく。彼らは因循たる風習慣例にとらわれない開明的合理的知性を備えていて、いたずらに神を畏れるのではなく、かといって粗略に扱うこともない。神祇の核心を精確に見届け、自然と人とのあいだに絶妙の調整を図り、神と適正な契約を結ぶのである。右の説話には、土地の人民と自然とが融和を遂げてゆく長い歴史が封じられていると思える。

当然のことながら近江大津も吉野も、もとは「自然」の地であつ

た。ある段階で天皇が「神」の資格をもつてそこを開拓し、宮を営んで、人が快適に暮らすことのできる環境へと整備したにすぎない。いわばそれこそが契約である。高市古人作と伝える「近江の旧き堵を感傷して作る歌」に、

楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも

（1・133）

とうたわれるのがそのあたりの心性をよく伝えているよう。「楽浪の国つ御神」は自然そのものの、都が荒れるというのは自然の神の心が荒れずさぶことにほかならないのであり、それはつまり、神と人との間の契約が解消されたことを意味している。飯泉健司氏は右の「楽浪の国つ御神のうらさびて」を「大宮人の不在」ということの概念的・抽象的な表現であると見、その「大宮人」には祭祀にかかわる神官が含まれていて、神官による国つ神祭祀の途絶えが京の「荒れ」を認識させるのだと述べた。前掲風土記説話の内容と関連して念頭に置くべき見解である。

ところで、和語「野（の）」は「里（さと）」とはちがって、自然のままに人が住むことのできる空間ではなかった。『時代別国語大辞典上代編』に「ノは山裾のゆるい傾斜地などをいったようである」と説くのは柳田国男「地名の研究」の踏襲だが、

山部宿祢赤人登春日野作歌一首 并短歌

春日を 春日の山の 高座の 三笠の山に 朝去らず 雲居た
なびき かは鳥の 間なくしは鳴く 雲居なす 心いさよひ
その鳥の 片恋のみに 昼はも 日のことごと 夜はも 夜の
ことごと 立ちて居て 思ひそ我がする 逢はぬ児故に

（3・372）

十一年己卯 天皇遊獵高円野之時小獸泄走都里之中 於是適值勇士生而見獲即以此獸獻上 御在所副歌一首
獸名俗曰牟射佐妣

ますらをの高円山に迫めたれば里に下り来るむざさびそこれ

(6・10二八)

右が題詞に「野」と記し歌文で「山」とうたう点を勘案するに「山」と「野」の地形的連続は認めてよいと思われる。⁽¹⁰⁾その際、集中に五例を数える「山にも野にも」の句も視野に収めたい。

あしひきの山にも野にもみ狩人獵矢手挟み騒きてあり見ゆ

(9・九二七)

山の辺に行行く獵雄は多かれど山にも野にもさ雄鹿鳴くも

(10・二一四七)

右諸例にもうかがえるとおり「野」はしばしば遊獵の地となり、事例は舒明天皇の宇智野遊獵(1・三、四)、輕皇子の安騎野遊獵(1・四五、四九)など枚挙にいとまなく、「長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麻呂作歌一首」にあっても、

やすみしし 我が大君 高光る 我が日の皇子の 馬並めて

み狩立たせる 若薦を 獵路の小野に：(下略) (3・二三九)

とある。単純化していえば野は山と里の中間地点にあたり、人は山に棲息する獸を野に追い下ろして捕獲するのである。人と獸の出会い地、言い換えれば人と自然とが交わる地帯が「野」であった。雄略天皇もまた吉野に幸して獵を催している。

冬十月の辛未の朔にして癸酉に、吉野宮に幸す。丙子に、御馬瀬に幸し、虞人に命せて縦獵したまふ。

(日本書紀雄略天皇二年条)

秋八月の辛卯の朔にして戊申に、吉野宮に行幸す。庚戌に、河上の小野に幸す。虞人に命せて、獸を駈らしめ、躬ら射むと欲して待ちたまふに、蛇、疾く飛び来て、天皇の臂を嚙ふ。

(日本書紀雄略天皇四年条)

古事記・日本書紀は雄略天皇代に「吉野宮」を記録するが、いまのところ現地宮滝に五世紀の遺構は確認されていない。

四 自然と秩序、宮柱太敷く

近江に宮都を建設し吉野に離宮を営む天皇は、A麻多智・B珂是古に相当する超越的存在であって、その卓越した権能によりそれぞれの地の自然は適正に加工され秩序化が果たされた。「天ざる鄙」が宮都に改まり、吉野の山川は早くに「荒ぶる神」の拠点ではなくなっている。そもそも激流吉野川のほとりに離宮など、自然をよほど巧く手懐けないと成しうることはない。しかし、そこで獲得された秩序は超越者が関与しつづけることによってのみ持続するのであり、ひとたび関与を亡失するとたちまちもとの自然に回歸してしまふ、そういう性質の現象であった。「麻多智の子孫、相承けて祭を致して、今に至るも絶えず」と語られるように、祭が継続することと人と神との間の契約が効力を發揮する。人が住まうこと、絶えずそこに通うことが契約の有効性を裏付けるのである。

「近江荒都歌」と「吉野讃歌」に即して、自然と秩序の関係性をもういちどまとめておこう。

(近江荒都歌)

自然「天ざる鄙」「志賀の唐崎幸く」「志賀の大わだ淀む」

…土地の本性

秩序「楽浪の天津の宮」「大宮・大殿」「大宮人の舟」

…人工物の建設、大宮人の関与

帰結「春草の繁く生ひたる霞立ち春日の霧れる」「大宮人の舟待ちかねつ」…自然回帰

〈吉野讃歌〉

自然「山川の清き河内」「花散らふ秋津の野辺」「吉野川激つ河内」…土地の本性

秩序「宮柱太敷き」「大宮人は舟並めて朝川渡り舟競ひ夕川渡る」…人工物の建設、大宮人の関与

「高殿を高知りまして登り立ち国見をせせば」…山川の神の奉仕、理想的景の現出

帰結「水そそく瀧の都」「激つ河内に舟出せず」

…離宮（人工物）の永遠、秩序の永続

「楽浪の天津の宮」の称を得て近江大津は一旦は皇都の秩序を形成したが、いまは人住まぬ地となり自然に回帰した。吉野には持統天皇が繰り返して訪問し、そのたびに国見や大宮人による奉仕が反復されるために、そこは常に「瀧の都」であり続ける。元来は自然であったはずの吉野川に大宮人と天皇の舟が絶えず浮かび、山川の秩序は良好に保持されている。

そのことを表象のかつ可視的にあらわすのが「宮柱太敷き」である。「宮柱」は自然と秩序とを截然と分かつ人工物であり、その内側に「大君」が、自然を操作しうる超越者として現在する。

ア…いかさまに 思ほしめせか つれもなき 真弓の岡に 宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして…

（2・一六七人麻呂「日並皇子尊殯宮挽歌」）

イ現つ神 我が大君の 天の下 八島の中に 国はしも 多くあれども 里はしも さはにあれども 山並の 宜しき国と川なみの 立ち合ふ里と 山背の 鹿脊山のまに 宮柱 太敷きまつり 高知らず 布当の宮は 川近み 瀬の音ぞ清き山近み 鳥が音とよむ 秋されば 山もどろに さ雄鹿はつま呼びとよめ 春されば 岡辺もしじに 巖には 花咲きををり あなおもしろ 布当の原 いと貴 大宮所 うべしこそ 我が大君は 君ながら 聞かしたまひて さすだけの 大宮こと 定めけらしも

（6・一〇五〇福麻呂「讃久迓新京歌」）

ウ…秋津島 大和の国の 檣原の 畝傍の宮に 宮柱 太知り立てて 天の下 知らしめしける 天皇の 天の日継と 繼ぎて来る 君の御代御代…（20・四四六五家持「喻族歌」）
エおし照る 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の 思ひやすみて つれもなく ありし間に 統麻なす 長柄の宮に 真木柱 太敷きて 食す国を 治めたまへば 沖つ鳥味経の原に もののふの 八十伴の緒は 廬りして 都なしたり 旅にはあれども （6・九二八金村「難波宮行幸」）
右が「宮（真木）柱太（高）敷く（知る）」の集中全用例、「太しらす京を置きて」（1・四五人麻呂、「飛ぶ鳥の清御原の宮に神ながら太敷きまして」（2・一六七人麻呂）など「宮柱」を直接詠まなものの含めても実はさほどの数に上らず、使用者の範囲も限られる。古事記・日本書紀の歌文にも見えないが、古事記散文や祝詞に例がある。

：於宇迦能山之山本、於底津石根宮柱布刀斯理、於高天原氷椽多迦斯理而居。(記上卷)

：如此^{久依左志}奉四方之國中^爾、大倭日高見之國^乎、安國^{止定奉}、

下津磐根^爾宮柱太敷立、高天原^爾千木高知^号、皇御孫之命^{美頭}、

御舍仕奉^号、(祝詞六月晦大祓)

もつとも、いまこの語の位相をあえてたずねる必要はあるまい。

右のうちに「殯宮挽歌(ア)」を含みけれども、卓越した主人の現在地という意味で例外とする必要はない。イ・エは聖武天皇による久遠京また難波京の造営を称賛するもの、ウは往古神武天皇の事績を描写、特定の地点を選んで宮殿を建築し天皇や皇子などの超越者が常住を開始すると、そこはいわば世界の中心となり特権的理想的環境が実現するという。とりわけエは「葦垣の古りにし里」であったところが大君によってひとたび「真木柱太敷」かれたなら瞬時にそこが「都なしたり」の変貌を遂げたとうたうので、「真木柱」の表象性が顕著だ。当該表現における必須要件は「太」、これは事象の物理的大小よりも「敷く」「知り立つ」行為について尊貴・絶対・完全・優越などの理念性を随伴させる。かかる理念を内包する具象として「宮(真木)柱」が鮮烈に人目を引き、「都」の恒常性を誇示するのである。先の常陸国風土記説話(A)中に見えた「標の税」とこれが等価であって、内と外、つまり自然と秩序とを区切る標識の機能を帯びていることは容易に理解されるだろう。

「宮柱」が太く高く敷かれた区域は秩序と繁栄を実感させ、人々はその見ることで充足感を得る。繰り返し述べたとおり近江にはかつて存在したはずのそれが消失し、吉野にはいまも堅牢に聳える。「かへり見」る価値のあるのはひとり後者のみであり、前者は見る

人に空虚感を与えるばかりである。

おわりに

近江荒都歌と吉野讃歌の先後関係は正確にはわからない⁽¹³⁾。だが、卷一の配列を重視するなら前者が先行する可能性は小さくない。人麻呂が吉野を「見る」ことにこれほどの執着を示すのは、獲得された秩序というものがやがて崩壊し、再び自然に回帰することを経験的に察知していたからではなかったか。滅びの宿命を知るゆえに人は永遠を願うもの、つまり「見れば悲しも」とうたったことのある人麻呂だからこそ「見れど飽かぬ」「またかへり見む」を繰り返し言明せずにいられたのだろう。

現在の吉野宮滝は長閑な山あいの集落、およそアクセスが良いとは言えず、古代史ファンや万葉愛好者でなければ訪れる人は少ない。だが、聞けば吉野町では「吉野万葉整備活用事業」の計画があり、ことし令和二年に整備基本設計が策定されて、令和四年には公園化の工事に着工するとい⁽¹⁴⁾う。計画どおりに進展して人びとに当地を「見る」きっかけを作り、歴史と景観の感受を目的に来訪する人が増えるのだとしたら、それは現代に成し得る秩序回復のひとつの手段にはちがいないのであろう。切に願うのは、その空間がほどなく「春草」「夏草」生い繁る土地に帰さないことである。

注

1 従来、吉野讃歌二首を同時制作と見るか別時の作と解するかについて意見の対立があったが、西澤一光氏「人麻呂「吉野讃歌」の方法とその基

底―「吉野」創出の根源としての「大王」―（『国語と国文学』六八巻一二号、一九九一年一月）は先行論の主張を止揚して二つの長歌の類同性と差異をとみに見据え、それぞれの本質を剔つて次のように述べている。

「吉野」を一個の範例的な世界として設定していく点に三六歌と三八歌の共通性を見るが、三六歌ではそれが「大王」の意志による選択に発して展開する君臣和楽の理想的現実として詠まれ、三八歌では「神ながら」によって一元的にもたらされる秩序と調和の世界として詠まれているのだと捉えたい。

同時詠の主張は澤瀉久孝『萬葉集注釈』によって「長短ともに、兩者相對應し、整然たる結構を示してゐる事は、作者がはじめより想を構へてこの長短四首の作を同時に詠んだものと認むべきもののやうに思はれる」と提示されている。

2 代表的な論考に、杉山康彦氏「人麿における詩の原理―人麿ノートその一―」（『日本文学』六巻一〇号、一九五七年十一月）、伊藤博氏「近江荒都歌の文学史的意義」（『萬葉集の歌人と作品 上』塙書房、一九七五年／初出は一九六五年）、青木生子氏「柿本人麻呂の歌の原点―「いかさまに思はしめせか」をめぐる―」（『萬葉挽歌論』塙書房、一九八四年／初出は一九七三年）などがある。

3 五味智英氏『古代和歌』（至文堂、一九五一年）

4 清水克彦氏は第一長反歌を「間接的な大君讚美」、第二長反歌を「大君讚美の感情を、正面から歌いあげた」もの、ただしそれは「大君一個人が讀えられているのではなくて、大君の御代全体が讀えられているのである」と評した（『吉野讚歌』『柿本人麻呂／作品研究』風間書房、一九六五年／初出は一九五六年）。また、村田右富美氏は「宮讚歌」の

A群（第一長反歌のこと―影山注）は空間讚美の長反歌といってよく、「御代讚歌」のB群（第二長反歌のこと―同）時間讚美の長反歌といってよからう」とし、「B群はA群を前提として、A群に依存した長反歌」であることを論定して両歌が同時詠であることを主張する（『吉野讚歌』『柿本人麻呂と和歌史』和泉書院、二〇〇四年／初出は一九九〇年）。「相互補充の同時作」と見るべきことは坂本信幸氏によっても説得的に述べられている（『吉野讚歌』『國文學 解釈と教材の研究』四三巻九号、一九九八年八月）。

5 五味智英氏注3の書。

6 西澤一光氏注1論文の次の指摘がたいそう示唆に富む。

「吉野讚歌」は、すでに存在しているものを詠むのではなく、その成り立ちの初発からはじめて「吉野」が創り出され、調和と秩序の世界として展開、存続していく所を詠んでいる。それが、「大王」に発するものとして歌われるところに「吉野讚歌」二首に通底する方法と獲得を見てまゝとしたい。

7 森朝男氏「景としての大宮人―宮廷歌人論として―」（『古代和歌と祝祭』有精堂出版、一九八八年／初出は一九八四年）

8 飯泉健司氏「国つ御神のうらさびて―荒都と祭祀と―」（『美夫君志』四五号、一九九二年一月）

9 柳田国男「地名の研究」（『定本柳田国男集』第二〇巻、筑摩書房、一九六二年／初出は一九二二年）に次のように記される。

元は野（ノ）といふのは山の裾野、緩傾斜の地帯を意味する日本語であつた。火山行動の最も敏活な、降水量の最も豊富なる島國で無いと、見ることの出来ない奇抜な地形であり、之を制御して村を興し家を立てたのも亦一つの我社會の特長であつた。

10 辻田晶三氏「『野』と『原』」(『古代語の意味領域』和泉書院、一九八九年／初出は一九八〇年)

11 形状言「太」について『時代別国語大辞典上代編』は「立派・壮大等の意で、神またはこれに準ずるものに関する名詞や動詞に複合して用いられる」と説き、小学館『古語大辞典』には「(宗教儀礼などに関する名刺や動詞などに付いて)りっぱな、尊い、神聖などの意を表す」と説明する。「奈加等美乃 敷刀能里等其等(中臣の太い祝詞言)」(17・四〇三)などその例。

12 「税」に岩波日本古典文学大系『風土記』はツエの訓を与えて「境界のしるしとする杖。税は大きい杖の意」と頭注するが、小学館新編日本古典文学全集は類聚名義抄訓を根拠にこれをウダチと訓み「建物の棟木をささえる木か」とする。「税」字に両義があるためにも可能性を残すが、恒常的な境界表示としてはウダチのほうが適当かと思われる。和名抄に「爾雅云梁上楹謂之税(音拙和名宇太知楊氏漢語抄云蜀柱)孫炎曰梁上柱侏儒也」と見える(「楹」は柱の意、「侏儒」は小さいことをいう)。なお、岩田芳子氏「杖考『常陸国風土記』夜刀神伝承」(『古代における表現の方法』塙書房、二〇一七年／初出は二〇〇七年)はこれをツエと訓む立場で「標税」の表象性を論じている。

13 村田右富美氏は「近江荒都歌」の制作時を持統天皇四年一月から二月上旬、「吉野讃歌」の公表を同年二月十七日吉野行幸時と推定している(『近江荒都歌』注4の村田氏著所収／初出は一九九一年)

14 吉野町発行「史跡宮滝遺跡の整備がはじまります」吉野萬葉整備活用事業紹介リーフレット」(二〇二〇年一月)

(かげやま・ひさゆき 本学教授)